

⑮ モデル事情

実習授業に使用するモデルを確保することは本校の教務課にとつては常に大きな問題であったが、戦時体制下において、それは増々困難な問題となった。左記の文書はそうした状況の一斑を物語る。

モデルニ關シ會議開催ノ件 [昭和十七年五月十九日起案]

案

年月日

教務課

森井、佐々木、朝倉、北村、關野、小林、高村、北浦、岡、山田、伊原、羽下、入谷、松田(義)、加藤(鬼)宛  
モデル雇入困難ナル事情ニ關聯シ御相談申上度事有之候間来ル五月二十二日午前九時三十分職員會議室へ御參集相成度此段及通知候也

五月二十二日モデルニ関シ決議ノ件

出席職員 校長、森井、佐々木、朝倉、北村、關野、小林、高村、北浦、岡、山田、伊原、羽下、入谷、宮本、(缺) 松田義之、加藤鬼頭太)

一、宮崎未亡人ニモデル周旋ヲ極力依頼スルコト

二、私立大學、専門學校、中等學校等ニ依頼シ夜間通學ノ學生、生徒中ヨリ募集スルコト

三、學校ニ於テ直接雇入レタル男モデルニハ裸体一円五十錢ヲ支拂フコト

四、宮崎未亡人ノ周旋セルモデルニ對シテハ

イ、男ニハ學校ニ於テ直接雇入レタル者トノ均衡上一円五十錢

(宮崎へノ手数料ハ別途支出)トナスコト

ロ、女ニハ従前通りトスルコト(裸体一円五十錢 宮崎へノ手数料ハ此金額中ヨリ差引)

五、男女モデルニシテ身体調査ノ上適當ト認ムル者ニ對シテハ生

活ヲ保障スルコト(例ヒバ夏休中等ハ給料ヲ支拂フコト 但

シ本人帰省旅行等ノ場合ハ支給セズ)

六、各科ニ於テハ學校ガ定メ配當シタルモデルニ對シテハ否應ナ

シニ使ハセ若シ反對スル者アルトモハ處分スルコト

七、月曜日ニ於テモデルナカリシ場合実技ノ内容変更ニ就テハ各

科ニ於テ適當ナル處置ヲ講スルコト

八、将来モデル少クナリタル場合ニハ二部制授業(午前 午後)

ヲモ考慮スルコト

以上

モデル問題ニ関シ油畫科教官ト教務課トノ協議會(昭和十七年六月十六日)

出席者 小林、田辺、伊原、岡、森、北浦、入谷(一寸出席シ)

油畫科教官ノ希望トシテモデルヲ固定級ニスルトカ或ハ給料ヲア

ゲルナリノ何レカノ方法ヲ講シテ貫ツテ然ル後ドウシテモ得ラレ

ナカツタ場合ニ初メテ実技ノ内容ヲ変更スル如クシタイ 従來學

校トシテハカ、ル方法ヲ講シテラナイカラ先ツ以テ之ノ方ノ実

行ヲ先ニシテ貫ヒタイ意見アリ 澤田校長ソノ様ナコトヲシテ得

ラレルニ於テハシテモヨイトイフコトデ協議シ結局モデル裸体ノ

場合衣円七十銭着衣ハ衣円式十銭トシソシテ此ノ金額ノ中宮崎ニ支拂フベキ金額ハ宮崎ト相談ノ上定メルコト、ス

油畫科ニ最少限度七人ノモデルヲ確保スルコト 其方法トシテ今週現在油畫科ニ配當シタルモデル(七人)ニ對シ七月末日迄繼續シテ使備スルコトヲ約束シ確保スルコト 若シ其契約シタルモデルニシテ欠勤シタル場合ニ於テハ其科ニ於テ善處スルコト 以上

モデルニ給與スベキ金額ニ関スル宮崎トノ内談事項

六月十六日油畫科教官ト教務課トノ協議ノ結果學校長ノ承認セル裸体衣円七拾銭着衣衣円式十銭ノ増給ニ對シ宮崎ト入谷〔昇〕助教授ト相談ノ結果次ノ如ク決定ス

増給ノ式拾銭ノ内拾五銭ヲモデルニ残リノ五銭ヲ宮崎ニ給與ノコト、ス 仍ツテモデルノ手取金裸体ハ衣円五十五銭着衣衣円五銭宮崎ハ衣人拾五銭トナル

學校ニ於テ直接雇入レタルモデルニ對シテモ右ニ同シ

### ⑯ 天心顕彰氣運と天心祭

「大東亜共榮圈」建設のスローガンが打ち出されるや、岡倉天心の“Asia is One”という詩的な語句を日本のアジア諸国に対する軍事侵略の一標語と看做して天心を持ち上げる動きが起った。

それが特に顕著となったのは昭和十七年であり、その中心人物は横山大観であった。一月七日には財団法人岡倉天心偉績顕彰会が設立され、会長には当時の美術行政の最高顧問であった侯爵細川護立が就任し、大観は評議員理事長となり、斎藤隆三が専務理事、安田靉

彦、小林古徑、前田青邨らが理事となった。六月、同会は第一回事業として天心終焉の地赤倉に記念館赤倉山荘および記念碑の建設に着手し、十月五日には共立講堂で日本美術院、東日との共催による岡倉天心三十周年記念講演会を開催、大観、田村剛、織田正信、脇本葉之軒らが天心について講演した。また、茨城県五浦の天心遺蹟を遺族米山辰夫から譲り受けて保存することとし、十一月八日には遺蹟に建設された記念碑の除幕式を行なった。大観を中心とするこのような動きは美術界に大きく影響し、天心特集を組む雑誌が現われ、天心顕彰を旨とする論説が各誌に登場した。

こうした風潮に押されてか、昭和六年の天心記念銅像建設以来天心に関する催しの無かった本校でも十七年十月五日に天心祭が挙行された。『旬刊美術新報』第四十五号(昭和十七年十二月二十日)は次のように報じている。

天心祭盛大 偲ぶ 英邁な東亜の先覺

東京美術學校興亞部(報國團興亞部)では、四十年前世を擧つて西洋文明に傾倒

した時、「亞細亞は一なり」の語を掲げ、我が國粹美術の高貴性と優越性を説き、日本が東洋文化の盟主たるべきを世界に向つて唱導した先覺、故天心岡倉覺三氏の、今年が恰も三十年に當るので、故人の人格を偲び、その偉業を回顧し、現前の時局下、自覺と決意とをその靈前に誓ふべく、この程天心祭を舉行した。時は十月五日、その午後一時から、東京美術學校校庭内の天心銅像前で美術關係者多數參集、嚴肅な祭典を行ひ、終つて同校講堂で六角紫水氏の講演を聴取した。尙、同五日から八日まで同校陳列